

大学生の農業体験活動に見る、 農業・農村との関わり方

～東京農工大学「耕地の会」を例として～

調査研究部 阿部山 徹

1 はじめに

近年、大学生による農作業体験活動が盛んである。参加者は、日常的に農業・農村について学び、将来、多くの卒業生が農業・食品関係の職につく農学部¹の学生に限らない。農学部がない大学の学生や複数の大学の学生が集まり、活動をしている事例もある²。大学生が農業・農村と積極的に関わり、都市における農業・農村の応援団として、その裾野を広げていくことは重要である。

大学生が行うこのような活動の1つに、東京農工大学農学部³の「耕地の会」がある。1989年に農学部の付属農場で始まった活動は、やがて新潟県などの農家との交流につながっていった。

この活動に関わった大学生は既に400人を超えた。現在でも毎年20名前後の新入部員が

加わり、活動を継続している。

この度、耕地の会の活動を長年に亘って支援してきた、塩谷哲夫・淵野雄二郎両東京農工大学名誉教授及び、今井昭仁⁴氏をはじめとする同会のOB・現役学生に聞き取り調査を行う機会に恵まれた。

本稿では、この聞き取り調査を元に、耕地の会の活動を紹介するとともに、この事例を踏まえて、大学生の農作業体験活動に見る、農業・農村との関わり方と今後の課題について見ていく。

2 耕地の会の成立

耕地の会とは、1989年に大学1年生であった今井氏が、農学科（現・生物生産学科）に所属していながら農作業実習が少ないことに不満を持ち、仲間とともに作った会である⁵。

- 1 現在、大学の農学部学生で卒業後、就農している者は少ない。『平成22年度食料・農業・農村白書』p. 232によると、平成21（2009）年度の就農率は、約2.9%（就農者数668人／卒業生22,685人）であった。一方で、経営学などの知識を身につけた大学生が、農業法人などに就職し、農業を始める例も出てきている。
- 2 農学部がない大学の農業体験活動事例としては、一橋大学の「田んぼの会」、複数の大学が連携する活動としては、東京大学・東京農業大学などの学生が参加する「SOLA」などがある。詳しくは、日本農業系学生会議JASC（URL：<http://j-asc.net/link.html>）などを参照願いたい。
- 3 東京農工大学は、農学部と工学部を有する国立大学法人。農学部の前身は、東京帝国大学農学部実科、東京高等農林専門学校であり、東京都府中市にキャンパスがある。現在、農学部では、生物生産学科、応用生物科学科、環境資源科学科、地域生態システム学科、獣医学科の5学科を設定している。
- 4 今井氏は、耕地の会の初代ゼミ長。東京出身の非農家である。新潟県旧・柿崎町（現・新潟県上越市柿崎区）での農作業実習・研修を経て、同町に新規就農した。稲作6haの経営を中心に、冬場は、しいたけの栽培も行う。
- 5 設立当時も現在と変わらず、農学部の学生の半数以上が東京近郊出身で、かつ非農家出身者が大半を占めていた。耕地の会の活動の前身となったのは、今井氏も所属していた農業の勉強会、「大地の会」である。耕地の会はその実践部門として位置する。この2つの会の顧問を務めていたのが、淵野雄二郎助手（当時、現名誉教授）であり、淵野氏は、同会が大学周辺の農家で行う農作業体験活動を長きに亘ってサポートした。

この活動は、大学教育の一環として、農学部キャンパス内にある付属農場の一角を借り受け、あわ、ひえ、きびなどを栽培することから始まった。

やがてその活動は、付属農場から大学近隣の府中市や小平市の農家での農作業体験へ広がっていった。また、活動の場を新潟県旧・柿崎町⁶（現・上越市柿崎区）（以下、柿崎町とする）、旧・松之山町⁷（現・十日町市松之山）、福島県喜多方市、宮城県丸森町などへ拡大していった。

3 柿崎町との交流

1) 個人での交流

このように複数の地域に活動が広がる中で、耕地の会のメンバーが最も多く訪れた場所が、柿崎町である。現在まで、延べ300人以上が農作業体験を行った。

柿崎町と東京農工大学の学生との交流の始まりは、1992年1月、当時、同大学の塩谷教授が農村調査を行うため、3年生の今井氏ら2人の学生を、この町の農家に派遣したことから始まる⁸。ちょうど小正月の時期であったため、今井氏は毎日のように、宴会に参加することとなった。次第に、この地域の魅

力に取り付かれていった。

4年生になってからも毎月のように柿崎町を訪れ、農作業体験や地域の人々との交流を重ねた。そして、大学卒業後農家になることを決意し、1年間のスイスへの酪農留学を経て帰国。1994年5月に学生時代からお世話になっていた同町の農家へ弟子入りし、稲作農家として、新規就農を果たした。

また、今井氏以外にも多くの学生が、この地域を訪れるようになった。その中から、1995年には、近隣の旧・安塚町⁹（現・上越市安塚区）役場に就職した増野秀樹¹⁰氏のような卒業生も現れた。

なお、受け入れ側の農家は、学生に「農家がものを作る気持ちを少しでも分かって欲しい」「農作物を自分の手で作る楽しさを感じて欲しい」など様々な思いを抱き、学生の農作業体験活動を支援したのである。

2) 耕地の会としての交流

柿崎町と耕地の会の交流は、今井氏が帰国した年から本格的に始まった。「会の合宿¹¹を今井氏のところで行いたい」と後輩から連絡があったのを機に、同会に所属する多くの学生が、今井氏の家や近隣の農家へ毎年のように訪れるようになった。

6 柿崎町は、2005年1月1日に、近隣13市町村（上越市、安塚町、浦川原村、大島村、牧村、大潟町、頸城村、吉川町、中郷村、板倉町、清里村、三和村、名立町）と合併し上越市となった。

7 松之山町は、2005年4月1日に、近隣4市町村（十日町市、松代町、川西町、中里村）と合併し十日町市となった。

8 塩谷氏は、1990年に東京農工大学に着任以前、北陸農業試験場（現・（独）農研機構中央農業総合研究センター北陸研究センター）に勤務していた。このとき、総合研究チーム長として、柿崎町の水田調査を行っていたため、塩谷氏は、同町の多くの農家と懇意であった。

9 安塚町の市町村合併については、注釈の6を参照願いたい。

10 増野氏は、神奈川県出身の非農家である。現在は、上越市（旧・安塚町）役場の職員を辞め、旧・安塚町の樽田地区の生産者たちと一緒に、「手づくり百人協同組合」を作り、道の駅「雪だるま物産館」を妻のいつ子氏（東京農工大卒）と運営している。

11 ここでいう「合宿」とは、「農家に長期間宿泊しての農作業体験を行うこと」を意味する。

そのうち、柿崎町を訪れた会の後輩が、今井氏とは別の農家に1996年に弟子入りした。また、会のメンバーではないが、同じ大学の大学院生が1997年に近隣の旧・吉川町¹²（現・上越市吉川区）に新規就農した。現在のように様々な就農支援プログラムがあったわけではないが、やる気と農作業体験で得た人脈を元に、柿崎町周辺に同じ大学出身の3人の稲作経営者が誕生した。また、会の後輩の1人が、今井氏と結婚し柿崎町に定住した。

最盛期には、この地域に一度に約30人の学生が訪れ、農作業体験を行った。

柿崎町と耕地の会との交流は現在も継続しており、毎年9月上旬に1週間程度、約10名の学生が訪れている。

4 現在の活動（2011年度）

現在の活動には、1、2年生を中心に、約40人が参加している。

主な活動は、①大学付属農場での農作業（年間）②松之山合宿（年間）③柿崎合宿などの単発の合宿④学園祭での「芋金つば¹³」及び松之山で作った「黒米」の販売などである（表1）。

各活動への参加は、本人の希望で決まり、一部を除いて人数の制限はない。付属農場で栽培する野菜は、月1、2回開催する会合で、2年生を中心に決定している。そして、週1回、土曜日から日曜日に農作業を行っている。大学外での活動の中心となっているのは、松

表1 耕地の会 年間スケジュール（2011年度）

期間	場所	耕作品目
年間	付属農場（東京都府中市）	野菜
年間	新潟県十日町市松之山	黒米
7月	東京都奥多摩町	—
8月	宮城県丸森町	養蚕
8月	福島県喜多方市	野菜・りんご
9月	新潟県上越市柿崎区	米、野菜
7月～11月	東京都小平市	紫芋
11月	学園祭（東京都府中市）	—

（注）聞き取り調査により著者作成

之山での「黒米」作りである。

地域生態システム学科2年生で耕地の会の元ゼミ長である毛利美久氏は、同会に大勢のメンバーが参加している理由として、「自分のできる範囲で参加できる」「視野を広げることができる」「この大学でしかできない活動である」ことなどをあげた。

現在の会には、農業生産と関わりの深い生物生産学科のメンバーはいない¹⁴。農学部の中でも農場実習がなく、農業・農村との接点が少ない環境系の学科のメンバーが活動の中心になっている。

また、現在活動しているメンバーの中に農家出身者は、各学年に1人位しかおらず、将来、就農を希望しての入会ではない。しかし、会の活動を重ねる中で、次第に、「よい畑や野菜を作りたい」「仲間と知識を共有したい」「農村を訪れてみたい」など、農業・農村に強い関心を抱くメンバーも現れている。

現在の耕地の会は、大学生になり、はじめて農業・農村と接する人達の活動の場となっ

12 吉川町の市町村合併については、注釈の6を参照願いたい。

13 「芋金つば」は、大学の学園祭（「農工祭」という。11月の中旬に開催）での人気商品である。1つの大きさは、たばこ1箱より大きいぐらいで、3,000個ほど作り販売する。1個の販売価格は芋の種類によって、100円、150円、200円と分かれる。金つばに使う芋は、小平市の農家の農場で栽培している。

14 生物生産学科のメンバーが減少した最大の理由は、授業での農場実習・農村調査等が充実し、そこで学生の農作業体験ニーズが満たされていることによる。

ている。

5 今後の課題

1) 一つの地域に腰をすえ、地域の魅力を発見する

耕地の会の活動は、メンバーが自主的に考え行動したことで、複数の地域での農作業体験を可能にした。その一方で、初期のように、同じ地域を何度も訪れ、地域の人々と積極的に関わるメンバーは減少していった。

今後、大学生と農業・農村との関わりがより深まるには、現在の活動に加え、以前のように、一つの地域に腰をすえ、地域や農家と長い時間をかけて接することで、地域の魅力を発見するという活動も必要となるだろう。

2) 大学入学前から農業・農村との関わりを作る

現在、農学部に入學するほとんどの学生は、将来就農することを希望していない。その理由の一つとして、「入学時には、将来の方向性が決まっている人が多いから」ということもあるようだ。つまり大学入学以前に、農業は就きたい職業として意識されていないというのが現状だ。

今後、農業・農村との関わりを深め、就農につなげていくためにも小学校・中学校・高校と進路を決定するそれぞれの段階で、将来の職業の一つとして農業が若者に意識してもらえるような体験や学習の場を設けていくことが大切となるだろう。

6 おわりに

本稿では、東京農工大学の耕地の会を紹介し、現在、農作業体験が複数の地域で行われ、学生が多く参加している現状を示した。

新規就農者が減少している中で、このような地域（農業）と大学・大学生との関わりが、小さいながらも長く継続していくことは地域再生のひとつの糸口・きっかけになるような気がしてならない。

また、農業（専業）が、大学を出てまで就きたい職業になっておらず、ましてや、大学の学部（名）から“農”が消えつつあるのが現状である。学生に農業・農村に興味を持ってもらい、農作業の実態を理解してもらうための、こうした会はこれからも必要である。

今後も耕地の会をはじめ、他大学においても、大学生と農業・農村をつなぐ活動が継続し、広がっていくことを期待したい。

（謝辞）

最後になりましたが、大変お忙しいところ聞き取り調査にご協力頂きました、塩谷哲夫・淵野雄二郎両東京農工大学名誉教授及び、耕地の会OB・現役学生の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

（参考文献・資料）

- ・結城登美雄（2009）『地元学からの出発～この土地を生きた人々の声に耳を傾ける』社団法人農村漁村文化協会
- ・淵野雄二郎監修（2010）『農業はじめてBOOK』小学館集英社プロダクション
- ・東京農工大学耕地の会（2007）『柿崎合宿柿崎交流記念文集～Love&Farm～』